



Data	2023-50
監督:	王家衛 (ウォン・カーウアイ)
出演:	鞏俐 (コン・リー) / 張震 (チャン・チェン)

👁️👁️ みどころ

エロス。そう聞くだけで、若者が興奮し、ときめくのは当たり前。したがって、いかにも日活ロマンポルノ風のタイトルだったオムニバス映画『愛の神、エロス (eros)』(04年)が大ヒットしたのは当然だ。その中の1つである、王家衛監督の『エロスの純愛「若き仕立屋の恋」』が44分から56分になったLong versionで公開。こりゃ、必見！

マギー・チャンの美しい脚を強調したチャイナドレスが魅力的だった『花様年華』(00年)と同じ、1960年代の香港が舞台だが、女優がマギー・チャンVSコン・リーだし、恋のお相手(?)も不倫相手のトニー・レオンVS若き仕立屋のチャン・チェンだから、その異同に注目！

さらに、コロナ禍に襲われた今、本作撮影時の2003年の香港はSARS禍にあったことを再確認の上、『愛神手』の原題、『The Hand』の英題に注目！感染防止のためには“接触しないこと”が最も大切だが、“愛の交換”のためには、手は不可欠・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■王家衛監督の名作が Long version で一週間の限定上映■□■

いかにも“日活ロマンポルノ風”のタイトルだった『愛の神、エロス (eros)』(04年)は、カンヌ国際映画祭を制した中国・アメリカ・イタリアの3人の名監督の視点による、純愛、悪戯、誘惑をテーマとした、3つの別々の物語の総タイトルだった。

アメリカからはスティーヴン・ソダーバーグ監督の『エロスの悪戯「ペンローズの悩み」』、イタリアからはミケランジェロ・アントニオーニ監督の『エロスの誘惑「危険な道筋」』、そして、中国からは王家衛 (ウォン・カーウアイ) 監督の『エロスの純愛「若き仕立屋の恋」』だから、そのラインナップはすごい。監督名とタイトル、そして中国の名女優、鞏俐

(コン・リー)の名前を見ただけで、「これは絶対！」と思うもので、2004年のヴェネツィア国際映画祭の話題をさらったのも当然だ。私は、その評論(『シネマ17』325頁)の中で『若き仕立屋の恋』について、『若き仕立屋の恋』にみる純愛と性愛—その1』、『若き仕立屋の恋』にみる純愛と性愛—その2』の小見出しで、その素晴らしさを評論したが、同作は44分の短編だった。

同作は2004年のヴェネツィア国際映画祭で非公開のプレミア上映作品として発表されたが、その後、尺が12分伸びた56分のロングバージョンとして2018年の北京映画祭で上映されたそうだ。44分から56分のロングバージョンになったことで、どこがどう変わった(補強された?)の?私はそんな興味をもって座席に座ったが、タイトルも原題が『愛神手』、英題が『The Hand』だということが、今回はじめてわかった。『エロスの純愛「若き仕立屋の恋」』も日活ロマンポルノ風のタイトルだが、この原題にも英題にも、映画が始まってすぐに始まる、若き仕立屋のチャン(チャン・チェン)が、高級パトロンに困われている高級娼婦ホア(コン・リー)の手で“性の手ほどき”を受けるシークエンスを見ていると、納得!さすが、王家衛監督はすごい!

■□■同じ王家衛作品だが、『花様年華』と本作の異同は?■□■

王家衛監督は香港を代表する名監督で、初期の代表作は第2作目の『欲望の翼』(90年)(『シネマ5』227頁)だ。同作は、1960年の香港を舞台に、頹廃的で自由奔放な主人公役のレスリー・チャンと、これに惹かれる2人の女性、マギー・チャンとカーリーナ・ラウ、そこにアンディ・ラウトとトニー・レオンら香港の6大スターを共演させた青春群像劇だった。それに続く『楽園の瑕』(94年)は『欲望の翼』の第2部として構想されたものだが、同作はイマイチだった(『シネマ5』231頁)。

しかし、王家衛監督には珍しい“不倫もの”で、トニー・レオンとマギー・チャンを共演させた『花様年華』(00年)(『シネマ5』250頁)は、素晴らしい作品だった。『宋家の三姉妹』(97年)(『シネマ5』170頁)で、次女慶齡役を演じたマギー・チャンは、前半は孫文の秘書としてテキパキと尋問をこなす優秀な女子の姿を、後半は共産党を支援して蒋介石と対決する革命の闘士の役を見事に演じていたが、『花様年華』では一転して、1960年代の香港を舞台に、同じアパートの隣同士に住む夫婦が、お互いの夫と妻の不倫を知って“急接近”していく“不倫モノ”を豊富な肉体と美しいチャイナドレス姿を見せながら、圧巻の演技(艶技)を魅せていた。

そんな『花様年華』と同じように、『若き仕立屋の恋』と題された本作も、舞台は1960年代の香港。しかし、違うのは、「夫や妻が浮気するのなら、俺たちだって!」とばかりに(?)互いに変な言い訳をしながら対等の関係で不倫を楽しんでいた『花様年華』に対して、『若き仕立屋の恋』は男女の年齢と力関係が圧倒的に離れていることだ。コン・リーとチャン・チェンとの年齢差を考えればその設定は妥当だが、最初から最後までその男女の力関係の差を強調した『若き仕立屋の恋』も見応えいっぱい!男女間に大きな力関係の

差があればこそ、『愛神 手』という原題も『The Hand』という英題も、いかにもびったりだった。本作の楽しみを倍増させるためには、本作と『花様年華』との異同比べが不可欠だ。

■あなたどちら派？コン・リーVS マギー・チャン■

1960年生まれのマギー・チャンが『花様年華』に出演した時の年齢は36歳。チャイナドレスを着ると、たとえ100gでも体重の増減があればわかってしまうため、撮影中はよく「太ったね、痩せたね」と言われ、その度にドレスを微調整したとのことだ。それに対してチャン・イーモウガールとしてデビューし、『紅いコーリャン』（87年）（『シネマ5』72頁）、『菊豆』（90年）（『シネマ5』76頁）、『活きる』（94年）（『シネマ5』111頁）を筆頭とし、チェン・カイコー監督の『さらば、わが愛／霸王別姫』（98年）（『シネマ5』107頁）への出演等でも中国を代表する女優No. 1となったコン・リーは1965年生まれだから、『若き仕立屋の恋』の時は39歳。美しい脚を強調するチャイナドレス姿を次々と披露した『花様年華』のマギー・チャンに対して、『若き仕立屋の恋』で高級娼婦を演じたコン・リーは奔放さと気の強さが目立っている。「若き仕立屋」の男を待たせていることを知りながら、平気で喘ぎ声を出しているかと思えば、パトロンとの電話では金切り声で怒鳴ったり、逆に甘えた声でおねだりをしたり……。他方、『若き仕立屋の恋』と題されているにもかかわらず、本作でコン・リーの美しい脚を魅せたチャイナドレス姿を拝むことは全くできず、チャンがアイロンをかけたか大切に畳んだり、チャイナドレスそのものがスクリーン上で大切な素材になっているだけだ。

したがって、チャイナドレスに包まれたコン・リーの美しい脚を見たい人には少し欲求不満かもしれないが、その分、高級娼婦として、若き仕立屋の男チャンに“いろいろなサービス”をしてくれるから、それに注目！しかして、あなたはマギー・チャン派？それともコン・リー派？

■コロナ禍の洗礼を受けた今、SARS 禍を再確認！■

『活きる』では、1940～60年代の中国の歴史が激動する中、コン・リーが演じる家珍が、夫の福貴と共にしたたかに生き抜く姿が感動的に描かれていた。しかし、本作の冒頭とラストは、病魔に襲われ死期が迫ったコン・リーの姿だから、実に残念！本作の舞台は1960年代の香港だが、撮影されたのはSARSが香港で猛威を振るった2003年。奇しくも2020年から始まったコロナ禍はたちまち世界的パンデミックとなり、約3年間、世界中が大きな影響（被害）を受けたが、20年前の香港がまさにそうだったことを、本作を観てあらためて再確認！ちなみに、王家衛監督はそのことについて、かつて発表したステートメントの中で、「人々が常に互いに意識したのは『何にも触れてはならない』」ということでした。私たちは、いつも手を洗わなければなりません。常に触れるだけで感染する恐れがつきまとう。私は“触ることについての映画を作る時が来たのかもしれない。それが、どのように伝染するかについて”と考えました。それはSARSについてで

はなく、“エロス”の話になったのです」とつぶっている。なるほど、なるほど……。

本作の劇中に見るコン・リー演じるホアは、高級娼婦としてパトロンを怒鳴り散らしていたが、所詮、娼婦は娼婦。美しさに衰えを見せてくると、さらに SARS のような病魔に襲われたとなると、伝染を恐れるパトロンたちが彼女に寄りつかなくなるのは当然だ。そうすると、ホアがパトロンに多額の代金を払わせながら、若き仕立屋のチャンに作らせていた美しい洋服の数々は……？あれほど高慢だったホアが、お金のために、ほとんど袖を通してない洋服を処分してくれとチャンに依頼する姿は実に痛々しい。もちろん、その依頼を聞いてあげてもいいのだが、チャンは自分がホアのために作った数々の洋服を処分することなど到底できず、大切に保管していたらしい。

本作の冒頭とラストは、全く同じシーンから始まるのでそれに注目だが、ラストのシーンでは「感染するから近づいてはダメ」とチャンの接近と接触を拒否するホアに対して、チャンは……？原題を『愛神 手』、英題を『The Hand』とする、王家衛監督独特の美しい映像を見ながら、そんなホアの最期の姿を見守りたい。合掌……。

2023（令和5）年4月26日記